優腰味諦集　上

三

和書門
類 二七〇七四
號 一一一
函 一三
架 五六
冊

内閣文庫
和書 類
二七〇七四 號
五六 冊
二〇〇 函
三 架

内閣文庫	
番號	和 27074
冊數	56（ 3 ）
函號	200　5

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり
国立公文書館
National Archives of Japan

明治十二年購求
大日本帝國圖書印
日本政府圖書
淺草文庫
書籍館印

後撰和歌集巻第一

春歌上

元日より二条のきさいの宮にてしろきおほうちきをたまはりて

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

春立日よめる

凡河内躬恒

春立ときゝつるからにかすが山きえあへぬ雪の花とみゆらん

兼盛王

けふよりはおぎのやけはらかきわけてわかなつみにや誰をさそはん

あらたまりとしにすゝの世のたまさ

月日はつらくとも月のつらなるこゝろのまま

ゆきされかわかやまのかたをかみえんとく

よみ人しらず

あさかすみたつるかけとて春霞のかすめひあかとさえ

朱雀院の子日におはしましけるにさはる事

侍りてえつかうまつらで延光朝臣に

つかはしける　左大臣

松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしかさくらはやもさかなん

・後撰和

まれにとふ人もあるなれ春の野に子日のまつをひかぬ日もなし
子日にはきのふのりしをわか今日は小松ひくなるわかれ
ありはせむとそいはれける　よみ人しらす
春の野の今日は小松をひきつれて我しかへさみなに摘む若菜
たいしらす
霞立かすかの野辺の松のみとりをみてもあかすつゝ
子日しけり月のかくるゝのりにまかせてとゝはく
つらゆき　源孫
春の野にわかなをつむとこしものを散かふ花に道はまとひつゝ

宇多院より子日せんとありけれは式部卿のみこをさそふとて
行明親王
古郷の野辺にゆくとつめるさへ若菜つむらん
まつ春のきのとものり
氷のとけしあやなす春風やけふ春たちぬとつけつらん
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす
吹風や春たちきぬとつけつらん枝にこもれる花咲にけり
きのふまてかけのやまふきしなすもかけ

きこゆなりやまかつはかなくも人の家乃むしもあ
とおもひつゝ侍りけるにとしやしてとふらひと
ふらひけれはかのまよわすわかくはかなくはかなくなりにける
あやのかりにも何ゝらしてける

みつね

かすかのゝ小松かくれにさくら花としをつもりておもひやるかな
ふかれはよそにのりてよそ乃山ゆきなれは
乃庭の木のこすゑやそらにあおわかてはなれ
ちりまさる

道綱母

もゝ出る雪のかくとおもふらはちりことにちるはなをゆきなれ

花をまつよもすかにいるにきゝよきてきゝ
かりはこれをまちしものひかりにはかなき
ほとゝきすひとわよりもいはかまたれむ月
のつらさをわすれてひとつにしはかなさ
よみ人しらす

花のまに霞たちけむ出しのきをまちはけぬ宿をみてまか
くにしる覧

閑院左大臣

こきかちつる梅の花にさうらふ小夜もちてきくそは
ひとゝ

お綾ふきてまつとおくるのたひの衣とそく開

中納言兼輔朝臣

たつね

霞とくらして梅はちりかゝりけるを雪のふるかと見ゆる花也
匂ひは其時分よりもまだ花なきさと
きのつらゆき
春霞なにはさだかに見えて雁かねの花やちるらん
桜のさかり時分に東よりかへる雁ひとつこゝろを
めづらしとおもひけるにちらんと思ふをせしとなり
くもゐなる花をよそにてぞみる十二月に
うら　　みつね
ふるとしの春のかすみのまくらことば三吉野山ニ霞
人ゆりへよそつゝしとぞ

いせ一
玉とつゝむ袖のうちに寄ちるなみだ
人のまよひぬくゆるさとこゝろもあはれや
見つれはもとかはることあくら心
春立て我身ふりぬるなかめには人の心の花もちりけり
よしとつらゆき
わかせこにみせんと思ひし梅花それとも見えず雪のふれゝは
きゝてことに人もあらしふる我やとにしめの袖もこゝにて
あかすふりかゝるゆきに桜花にまかふ
嵐吹はちるもあれば梅花の香の衣にしみてや

我やどの梅のはつ花ひるは雪よるは月とみえまがふかな　よまり
むかしの花よりもまさりてにほひこそ無のかはらぬ色かはらぬ
うせし法
袖もあればやまぬしの袖は匂ひこそうつせ君をまたん
桜とものつきかはりつゝわく
心見て梅のかあやな梅もうそとおもへ女しれる人の心の春
ことしよりくちはてける女のこゝろいかにやおもはれ
まつらくせむついたるとしのくらしもつねなれ
気にて

人の心さしは深きなれば君こそかはり行て清らかにゆきてさかり
なれしとは
梅もかをる咲くはるの春風によそふる人やもとつむし
春雨のふるは野山にも今かくのつけむし梅の花をさかりかわることの
かおりて春は雪の女房の我家の花の風に鶯なる
音さむいつもかすみて春の鶯の風とともにきりかみ人の心さは
鶯乃なきけるこゑにいさゝ花のいとしても我は人はなる
花のにほひをさそふなるに鶯のいま春をさそひ行かんとて
春の山のはなをつつむ花の袖はつまてらん
かいさりてゆくる人の家にまかりて

一梅の木佐くはこの花はかなよふむしときかす
らひをうれてせんとつひろくを言のつゆ
くれて
ひめ乃花つけ蔵にぬれぬ人のなきてつかはせぬ
朱雀院の兵部卿のみこ
中納言長谷雄朝臣
言葉につけそむしめや白かん毛ゑん枝にとかくふ
春の日ことゆつるてものてよめる
よみ人しらす
梅花ちるてふなへに言葉のすゑてつかくへぬ風も
かくいひすゑ侍ゆきしらの花乃まへなる御

返事ひやりて　みつね
かはらの家ひさしく人すまてある所にかきたる鶯のなき
松のりしよこれ乃ゆゑのをかて花をみんかわく
坂上是則
梅の木をわさわの松をひよみてつらは花をとをれはとふれ
藤原雅正
花のころいちゐのすけつわするやよつてのまつ松の緑をみ給ふ
わが松のしらをよみつく
みつね
ねたうるとてのへつくむしめ乃花かそほとくよはかはなね

これのあまりとみしてさけるくるくまふ
梅花よりしものかわりもとろへ成

貫之

かく雪ハけふのみ梅もちらはしと守おもひてとを
をしむけのおいやのまくよ梅とうつく
行ふするはこそせりわの夜花さなかる
しもうるとものをのえすとおもひてとの
うちとれをいつくといひてつれ
春とよふ咲あさつれよ花みれなとうともまてありすまるらん
りしめて宰相よなりてゆくらとしいかん

後撰和歌集巻第二

春哥中

さしおもひくらしひき花にまうてつゝあかすして
のこれ松をすゑおゐかり

菅原枝輔朝臣

うつ時花さんみよし思ひもぬよ咲ちるこれなさつむにあさふかね
ねやのまくよ行のあるすめやとわ傷て

藤原衛朝臣

行とく夜春はかし鶯のまくふるさとひくかくつまきれ
やすとれかるの山桜まりかるとて

いその神ふるの山への桜花うへけん時をしる人そなき
僧正遍昭

花山にて道俗さけたうひけるおりに
素性法師

山守はいはゝいはなん高砂のおのへの桜おりてかさゝん

おりしもさくらをおりてとらせたれは
りしあるしにかはりて　よみ人しらす

桜もつろひしきさ桜枝に風をかみすゝまれなかくさ海よ

返し　いせ

見る人のかけちんてもあかぬ桜花わかれおしみちらは

さくら花の一枝をみれはよみける人一源
の道の山の桜をもの見けん人にしもおくりて侍る
兼輔に侍りける中よりさくらのさきたる枝をおくりて
坂上是則

桜花けふよくみてんくれ竹のひとよのほとにちりもこそすれ

たいしらす
よみ人しらす

さくら色に衣はふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに

貞観御時ゆみのわさつかうまつりけるに
河原大臣

久かたのさくらはつくに我身つさめまさんかこあにゆきて風のふくまに

家よりもよそにさかりと見ゆる時我家のさくら
花よゆかしつゝ家に行らん

菅原右大臣

桜花ぬしをわすれぬ物ならは吹こん風にことつてはせよ

春のこゝろを　いせ

わかやとの花にもそえて見る時そ春のこゝろの山鶯そなく

ちる花をみて　凡河内躬恒

あひ思ひてふるさとみれはちる花もあからぬものからなれすあけなは

梅の花をよみて　よみ人しらす

吹くる風にほひを春の霞にさそはれてにほふ梅か香

朱雀院のさくらのおもしろき事と延光朝臣
語りけれは見るよしもかなと申ける返事に
折とて昔を思ひ出て

大将御息所

さきさかす我にな告そ桜花人つてにやはきかんと思ひし

たいしらす　よみ人しらす

春くれは山の桜をまつとてや花におほくの心つくらん

春霞たなひく山の桜花うつろはんとや色かはりゆく

大空におほふはかりの袖もかな春さく花を風にまかせし

やよひのつこもりころよめる

かけまくもかしこきけふのはなのいろをみよの御遊

春毎のつらねの数のさくらはなおもふことなくてけふもかけ

きみのちとせやよろつ代もつきすまことのはならすみよ

つかはりてわかれ

もろともになみよりいつる春風のさそふもしらぬ花の色かな

山のはをまつつきそら

藤原師兼朝臣

春郷のつらねに千歳ゆくつるもちよはあひはて

東門のみやこの雲にひかりさす

そこの花にもしらなみかゝりておほゆらん

ゆかしさはそらにかほるしら雲のたつ

山里にちるをおしまぬさくら花こゝろのまゝにさかりをそみる

わかれ

にほひをそ花のさかりにそへてみるみよのちとせの

小貳をかはりて　藤原朝忠朝臣

こゑたかき花の色かはらてみよしのゝ山のさくらを

なかし

我こゝろ色かはらぬ山のはのさくら花さかりゆく春をおしまん

そのしつれ　文道高風

春のゆくつらねを花に見るそのうちのさかりの春をおしむ

寛平の御時花の色霞にこめてみせすといふこゝろを
よみてたてまつれとおほせられけれは
藤原興風
山風の花乃かゝとふふもとには春のかすみそほたしなりける
たいしらす　よみ人しらす
春毎のなかるゝ川を花とみておられぬ水に袖やぬれなむ
京極のみやすところの花の家にて
春霞たつ雲井よりわかれゆくかりのこゝろもなかれたる
よみ人しらす
ねられねはちるをもまつ我なれは春の霞にたちそまかへる

思ひてわかれしかとの人のありけれは春の女あるし
ときつゝてさくらをてつゝこそみてまして
さくら花ちれはこゝろもなくなくそ
わか宿の花さかりにすくそて花のさかはへてゆかん
しれ行のよそなる人の家の花をとりて
亀暁王
ちりまかふ花のたちよりてこそかはちるとやみん
よそにみてこゝろのまゝにこの家によそへて
久る
春道列樹
我宿の花みかてらにきてそみるかひのあるにこそ

壬生忠岑かたゝのつらゆきにおくりて申越
こゝろよく御かへりつゐてはあやしうみえく侍るを
きこゆる事なれは
きのつらゆき書
かへすへすかくかた候て長々しくやもとつくしかたし

後撰和歌集巻第三

春下

贈太政大臣あひしりて侍けるに[illegible]

しるときゝて[illegible]

故顕忠朝臣母

鶯のなくなるこゑはむかしにて我身ひとつの[illegible]

さくら乃花のにほひさかりの[illegible]

みく中務につかはしける

貫之

いさかくてをり[illegible]桜花ちりのまかひに[illegible]

返し

千代ふへき[illegible]桜花ちるらむ事常にやはある

題しらす　よみ人しらす

散ぬへき花のかきりはおしなへていつれともなく[illegible]

朝光[illegible]

ちりぬれと[illegible]

[illegible]花をみる[illegible]風の吹にこそ[illegible]

[illegible]

春の日のなかき思ひはわすれしを人のこゝろに秋やたつらん

たつしす

さそふとも花みるてふ若葉色の我身にかゝる雲のあつさよ

つらゆき

風そふくまちて花の香は里にのこさぬ事ぞうらめしき

あれやこゝろにすこしかくる母つれなくもおもへ

行かれし梅にある萱の花をつゝみていれ

ちしけ母　よみ人しらす

我やとふすこれの花のあかれねきやうらへやわらと鶯子

あめつし詠

山たかみ雲と見えてちるとも雪とやこのへのくらつ部

春風のさそふ霞とちりかゝる花の香おほく匂ふさき

清原ふかやぶ

おもふ春はさくら長閑なる花のふゆやまよりちるらん

比ねはやうそこ法にけるをとしたゝられけり

ちかきてのものにおりにけるいかなる枝とおも

かたこれそこれ花よ兄なるといわくれし

こまちこさみ

わやとれるのけふこそ春と見えつゝふく柳ゐの花をこそいへ

ちるのみとのふ花せしやまはあるてつゝのよ

はなおりしひとるを今そてあかんかむきとら

春のいけのほとりにて

よみ人しらず

春の日のかけそふ池の鏡には柳のまゆそまつは見えける

春の雨のふれはかれ花おりしかんなるまに、

わかちるてもやいてぬれぬとこそあはれなり

延喜御時内侍のかみの賀の

わすられぬくを乃くさしたる次に

凡河内躬恒

かさせとしを光もかくれぬこのふみに花のおりてかかた川のまつ

よみ人しらず

ちたけれ

まだせぬものかたきよのおもふにそ花とこそ人とたのまぬ

花のりしみてこのれしれりともなくちらさそ

おもひやられつつなくらむ

貫之

春くれは咲てふことをぬれきぬにきするはかりの花にそありける

春霞たちはかくせとも花のつけくるわさなれは

わかるはしらぬ

きのかたれにつつしてかきそら

よみ人しらず

春霞立かくしても花ならはみえすとかをれ山さくら
おもふこゝろりもわか世のゆめとこそ作わたれ
春日山ふもとのさとのかすみとはてらくもれる我と払まん
ちとつしめ　いと
鶯よ身をあひのこてもちらまてにはよ家にかへる花はみちしほ
りしらのみこ色花のむこのあはれはすく
ならと法宮のめしてかの滝よまつひとわく
えあ筆も作らむわたれとあくらも成む
さくらの枝よさしてかのさしまさしと世
りしらのみこ
なる

花のつゆは昔のものかたりの今の世のことのたゝひとは哀れ
月のおもしろきをみくらへよとみえく
源さね　あまの
わくらの月と花とをおもひくらへんとてわれ今みをや
あはれのねとゝまる家には若菜法ヶ方もし
つゝしきちる　擬古草　廿
実こゝろそ今さてもおもひな世をひとむかしの花
むかしのゆめの世の月のかわてのもしとそめ
の家もし敦忠朝臣のまうわかりひしらくも
まての花のちりわたるおもかけ月かわてまの

いとゝ惜みし家の今はいかにかゝるらん
よみ人しらす
海わ風ふきぬらん桜ちらまくをしも春は見ゆらん
題し　敦忠朝臣
風ふけは花の白雪をちらせて桜花ちるとや人のみゆらん
桜ちる木の下風はさむからて
貫之
はなれとも春にまたちりてさくらかみのちしれぬとそ見ゆる
花なき山吹のおとろきて
亀浦

わきてなほひとへ山吹の八重なりしかくれてほしかりけり
たいしらす　藤原元方
この世にはひとつなき花ならは人もいとはし今は
寛平の時きさいの宮の哥合によめる
かはつなくを　藤原敏朝臣
春雨の花の枝をわけてなかれなはかりやくると
花のくきもまたとまらせらんのつゆとて
よみ人しらす
春ふかみちりかゝる花の色をそへてまたなにゝかは
女とも花とんとてのへにいてゝ

曲ハ侍らぬかの朝臣

春くれハ花みんと思ふ心こそ野への霞みとゝもに立けれ

おもひしまてわきて人の心さへはゝかりけれハ

花盛に清水へまかりて計留

しらぬ人ゝ返

秋まてとまよふ山ちのゆふ霧花よつ家てハ立さぬ家

返し　源清蔭朝臣

冬こもる雲の霧をたつのすれは花のおもかけたつねん

山桜を折て送り侍とて

伊勢

春霞たちてゝおれる山桜色こそ思ハさくら花ちり

さやかにもよそにしみえは花のみとりてこゝろ

すゝて京乃みやこのちりとつゝりまいる

よみ人しらす

神さひてふるの里に出家人の都よりまかりて花をたつねて

法師よりもんのかわかれたる人のまかりてかけ

てれくれ侍るのちあひけりけれ侍らて

人のもとへ月ころていふ花ハさかりなれ

やとりにく侍れて

みよしの吉野の山のさくら花雪とのみこそみえまかりけれ

亭子院歌合のうた

山さくら咲ぬる時はつねよりも峯の白雲たちまさりけれ

山桜をよめる　貫之

白雲とみえつる花をさくら花けふはちるとや色ことになる

たいしらす　よみ人しらす

わかやとのけしきは春の花の色もわかくてしかみよかし花

花さかはわすれぬ色に吉野川けふよろこひ山吹

人のこころ春のあらしにあらねとも山かけの

ちりかさしなんとこれみえていかにあふらん

あかれしのかさへ蛙の声せしもいかにたゆらむ山吹の花

弥生許の花のさかりにみちまかりけるに

僧正遍昭

おりつれはたふさにけかるたてなからみよの仏に花たてまつる

たいしらす　よみ人しらす

水そこの色さへふかき松かえに千とせをかねてさける藤浪

やよひのしもの十日ころに三条右大臣

兼輔朝臣の家にまかりわたりて侍るに

藤の花さけるやり水のほとりにてかれこれ

おほみきたうへけるついてに

三条右大臣

かへらむとしけるに藤の花につけて　かへしに
いろふかくにほひし事は藤なみのたちもかへらて君とまれとか
兼輔朝臣

さをさせとふかさもしらぬ藤なれは色をは人もしらしとそ思
ことゝもおはりてあそひしものゝなこりなりけり
たちかへりよふかくまかりけれは月かはと酒わ
くるのあしたに
貫之

きのふみし花のかほとてけさみれはねてこそさらに色まさりけれ
三条右大臣

つねはまうてきかよひけるところにさはる
事侍りてひさしくまうてこてとしこえて
そのあひたにあるうたのやうにてかへりこそわ
よみつかはしける
藤原雅正

君こすて年はくれにきたちかへるはるさへけふになりにけるかな
かへし
貫之

君をおもふこゝろなかさははるの日にいつれまさるとゆきてはかりみむ
はまむらにてはなかはらのしけるかなみちにあはれなる花をゝりて
たゝしつ
よみ人しらす

打しめりて春のかきりのけふの日の夕暮にさへなりにけるかな
みつね
ゆくさきをおしみし春のあすよりはきにし方にもなりぬへきかな
やよひのつこもりに　貫之
ゆくさきをまたとしふかくやすかると春のかたみにおしむけふかな
よみ人しらす
花しあらはなにかは春のおしからんくるとも今日はなけかさらまし
みつね
暮て又あすとたになき春の日を花のかけにてけふはくらさん
三月のつこもりの日ひさしうまうてこぬ人に

兼輔朝臣
一重のみ残りてつゆはなの花ふきけむかせこそちるらめ
貫之
あさ緑いとよりかけて引まゆのあさ風にちるはなをみる
たかまつ
よみ人しらす
鶯のなきとめてふる玉柳やさ風をわすれ春の山をは
さくらの花のちるをみて
みつね
春のまにおきて見ぬ桜はちるとおもひけふのこゝろをたのまて
あつよしのみこの花見侍るところにて

源中宣朝臣

散事にさふらひてこれかれ桜のやうなる所
桜のちるをみて　よみ人しらす　源
さくらつよきあるはなにわかるゝけふの月見つゝかくれ
孫王の御前あくるしつゝさあ見ゆる
中将よりつくたち大臣家にまかりける
貫之
あまわさへあわてゆくへにきよくふかきまかふ花の色
むし　左大臣
はるのわかれのとけゆくさきちる花の色にあかてさらなん
ゆきてみんあすのあかつきまてはわかく
つら梅善
みをえん時そとゝおもへとたのまれぬ身にわれなれは　かれきまれ
悲之かくてなかしちしまなん身月かはるゝ

後撰和歌集巻第四

夏哥

題しらず　よみ人しらす

けふよりは夏の衣に成ぬれときる人さへはかはらさりけり

卯花のさけるかきねの月きよみいねすきけとやなく郭公

卯月はかりわか家のちのすこし侍りけるに
かつらの川をうつろひてんと侍りけるに
よるこよひはかりはかくれて

郭公きなかぬさとのいちはやくまちしよのこゑのきけ
ねし

時鳥まつ猶峯にて思ひはまなくときゝぬすかなや
ものゝいひかけしわかそらへのつまこひ付家
里そその家のかきね○のうれしさをおもひて
いひつく付たる
うのはなさき垣○○卯花もさしこえてと郭公の付也
也し
うきさ秋と思ひしに里みなり乃花咲たる垣ね見えて○
うちよするのちきれ○ある家よく
付さしはなれる雪とみるまても垣○にたつよきけふ卯花
夏はあちこちさいはいまてゐる事とてみつのゐけは

雨おちる白き垣○乃のはなおもてくもりきてうちかゝる雲のかけ
時鳥月の雪としみるまてにかゝる○風にまさけ卯花
ふきさ俤ぬへつらゆふ郭公にて卯花のけしからぬ
卯月もかれの月おもしろからぬ人あり
けふも暮ら
あさかに見まくこめてたいも時鳥月をまつ人にさらに
谷乃里にたつらしきかる
たかきこの言葉山嵐郭公をきゝてさひしきおいらくもおもふ子
夕暮しらぬつを
まつ夜くさ月まつとし時鳥鳴○あやしと人の枝につけせん

若菜のかたへの命婦によすこし侍りくおもしろき
人のてよりわかなまいらせ文のはしにかきて
あまりつゝ若菜からにもはつゝしきを
良岑義方朝臣
おなじ人右の宮のあかさまにわたりかれかみかれ
賀茂の祭の日つかはれ見侍りけるに女のくるまに
たいつくし侍りける
よみ人しらず
りつるやそうちくのまつりけてそでの袖あをいかる
なし

梅の花をりてつかはしける人のもとによみてつかはしけれとも
せしいとう次
こゝろさしふかくそめてし折けれはきえあへぬ雪の花とみゆらん
読人しらず ある人のいはく前太政大臣の歌也
匂ひつゝちりにし花ぞおもほゆる夏は緑の木のめのみして
朱雀院の春宮におはしましける時帯刀ら
たちはきとも月もかはらぬに書ならへてさけ
ことしきこれかれうたよみける
大春日師範
月毎にまつの雪を人のゝ時はかくさきすやの鶯もなき

夏夜かゝることゝひくをとこにて

藤原邑輔朝臣

たかゝよのかきもゆくまてきく夜の松風すゝしくそあらん

松のしつくを

貫之

夏の山下水はもりかひかきとのねはよみかへるらん

藤原高経朝臣

夏の夜はかつみなからのあけゝるをまた梅の花かをるなり

みふのたゝみね

ゆめよりもはかなきものは夏の夜の暁かたの別なりけり

おもひたちて何ゆへさゝ中なれとこれは心よせける

あかなくにまたきもあけてあはれなとなかきよをのみたのむ

なれて　よみ人しらす

またあかぬ思ひはわれも夜をこめて夏の夜のみしかき月にまかせつる

夏の夜はこてあけぬるをゆくすゑのかなしきことはかりなり

伊勢

ふたこゑときくとはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな

人乃許よりつかはしける

藤原基国

何となく夏よはかなくゆく夜風のつきくさにこそと歌つかはしける

よみ人しらず
うきあめのしけくは杜鵑わかぬ別に音さへそふらし
おやの事侍りけるころほとゝきすをきゝて
かはるくさをのこゑのなく郭公さけはみ殿に
四月にかはる宣に国へまかりける人にいかなる
ありけるをきゝてよめる
郭公けさはいやはや鳴まさる我は別の折そこひしき
返し　しらす
独ゐて物思ふ我をかりくことふはまつよをこゝろにして
もろしあけつるれる郭公二こゑとあさて字

五月ちかうなりてそのいしふ母よりうらしきそ
かさぬらん我に山の時鳥末摘くの声はきゝこゆや
返し　しらす
さ夜ふけて鳴つるを郭公なけはみ山よりの房ん
おきかりつまへそのひに時鳥をきゝてぬよめる
三条右大臣
かくふん侍わぬゝを乃をれとしもゝ
そかは五月のあり毎すうやこて月おから
あわきろよさけらんとそ侍る
とおほいつれかくこそ侍らさりけれんめらや

ものいひあるましいかにせんとこそおもひ給ハゝ家

出つゝ　　侍るゝの女

元月廿日よ子の紀くろうを月出見れにやかよみて出雲にこれ

女こゝろて侍らん人にお折しかは侍るくつら出つ

よろん人に言す

やうしわ我言ああひし桜子乃花さかわ也人に申お出家

たかしうす

玉江の山鶴おもしく难は海さらと書とのこれなく

元月みに面乃に能はなしく母しゆかよせる女

かりとよりかわらかわさるを

つれくとおかむしかとこの郭公まつけてそ孫字の風往く

女

女しい言ふる

色こその花ともちもみよ杜鵑ふ西をかうそうこもさき縞お

様にて書こひし時鳥みい山よさこうおそてなく

春乃花よ並うしき命のくとあかてふ梅そこうへよわそう

女郭公ん年月かわうてわきそうよこうし車かゝて

きこてわくくのよしよ月おもひつゝひらうてのらよ

以から也そう　　侍従

郭公よつらうみうき書ときうくそあてあらぬひとそ風ほおいぬめれつれ

五月やみ川ぞひくらし筆捨ゆく
よみ人しらず
さみだれのつゝみ舞ふ海に浪風の吹あへで我も絶なん
世の中はこれのひろく浪つゝひくるまて
枯野の下もえにあれて蔓の初れ曉なれやあなかしこ
たゞしらず
打よりて露もなきさへうらめしきも我ならん
涙のなかき夜の草まで心をく露ぞ今しるのせ蝉の音
八重の葉もさやとよむ夏虫の聲に我身のなげき
空蝉の声きくからに袖ぬれし我もまたこゝろあり
今年は川にうしまく
前斎院中将
いかでいかん山家の岩村なれば川ならぬ音ぞのこりける
よみ人しらず
郭公なのみならず夜半をきく程にこのよの中は
人しれず思ひのかなしさよ秋の夕暮
春やとき花の後に猶をの子ならん
さて夏の夜をまつとしも今は
春夜に思ひそめて……
ありし

ゆきとのみこきちらすらむ風さそふ山の桜ちるをみて
亭子院のまくらことはに歌よませたまひけるに
夜の花をおもひてかちらて(?)花のこのもとに
つけくはへける(?)のはなをおもひてよめる
太政大臣
桜花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そたちける
寛平御時后宮の歌合の歌
春はたゝ(?)よみ人しらす
あてしこの花ちかく(?)の秋をまつかな
ひと(?)へかりしをやすまたしる(?)花の(?)なかりける(?)
夏の夜は月もかくれぬ(?)そらに(?)さやかにみゆるからなりけり

かきくもる雲ゐにて鳴ほとゝきす夏のよひの月
秋をまて(?)夏なきて(?)ゆくほとゝきす郭公なくこゑもきこえぬ(?)
夏山のみねのこすゑもたかけれはそらにそせみのこゑはきこゆる
五月やみのかくるゝみちのくらけれは
つねよりも夏の夜のみしかきにおもひあかしつ
よみ人しらす
天川浅瀬しら波たとりつゝわたりはてねはあけそしにける
月こそ夜はまつらめ(?)かはつなくなる
きてかくこそひとしれぬ(?)ものおもひ(?)
貫之

飛ちる郭公きこへつねかてとまりもゆくへしらす

なし　萩原雅正

鶯鳴ぬる聲をとしつきにかはらすきくの

鶯しらす　よ見人よむ（？）須

菖蒲しみ見とたゝさえて到おもく哉又更くるゝ人のあはれ

宵闇月おもしろく侍りけるに

しぐれくるむかし神無月あきの霜もや秋とゝなりなん

たか月いとしつかにまかりて侍

乃おもかけとりて

かも川の水底すみて照月をゆきてみむとや夜もふけぬらん

みか月やさい川あかきろせし

夫乃ころをよそにかはらぬみそらをみそきはせよ　とも

後撰和歌集巻第五

秋哥上

是貞乃みこの家の哥合に

よミ人しらす

俄にも風のすゝしく成ぬるか秋立日とは
むへもいひけり

打つけに物そかなしき木葉ちる秋の始をけふそと思へは

もの思ひけるころ秋立日人につかはしける

世乃めくし君はつれなき秋風はうきてけれ我身かし

おりに事傾くるゝ哉

いとゝしく思ひける宿の荻の葉に秋とつけつる風のわひしさ

題しらす

秋風の打吹そむる夕暮はそらに心そわひしかりける

大江千里

露わけし袂ほすまもなき花とかく秋風まさる吹く

無りしをわか身をかりに涙ひとつそ有

侍ける

よみ人しらす

秋萩をいろとる風の吹ぬれは人の心もうたかはれけり

返し

在原業平朝臣

秋萩をいろとる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは

源宗于朝臣時々かよひける所に七月

のはしめの日計にまかりける月の出てのちはかく

なりてなむいひつかはしける

閑院

あふことは七夕つめにかしつれとくたちぬるまてあはぬなりけり

豈いふ返し

よみ人しらす

天川星の渡しもなかりせはおりたちぬへき心ちこそすれ

七月七日よめるてまかりてさしつかはしける

毎年わたらぬ人くもなれやつく

源中正

あまのかは水波さわくそれ天川にいさいたくるふにゆんとしは

返し　よかんへしら波

水月のわわさ北世三了岩瀬ぬさしわ流れにまた散りゆくなり

あめふる月よ女人りとてつらしきそ

菅原忠道三

たなはたにかしもわかれ天河このよにわたして帰れ

かれはてくる男の七月の秋まつてこそわかれ女

ねよみてゆかしくよそへんまいらす

ひくかれ風にわかよのさこ夜は打つゝみて露あかゝわら

かゆつのへのりとらわかまちにしていかん

ゆひとこそくゆわくれて

こといくあなさんと思ひたまへたなはたこそつかしかくやはわ

返し

なくひかさはとは我を織めつさむ七夕つかへ人めやかりる

歌しすけ

天川かゆ風く流れくりそあらはゆ風をかへりまいつくへしもやらん

むかしたえぬ袖かなれまれし秋のよそわかれぬ一夜のこと

秋の夜の我あふなさこゝろあかてたし夜ぬれしとあかん

望んあの天さらへてしんゆ風てをわいのわゆけ袖と

まねとの日よ越後荒く人に川ゆくしきそ

藤原敦忠朝臣

わふことの七夜もなに七夕よおとりやまさらん六ハ波高

七日の日　よみ人しらす

七夕の天の河瀬ハ今夜さへとをかた人のわたらさらむ

七夕をよめる

天川とをさしてわたれるかせなくて夜ハふけゆけハ帰てそ

銀河岩こす波のたちかへり秋の七日のけふそかなしき

きのとしのり

宵なからや天の河にあはせなんなみこす(?)さしもなく今ハ

よみ人しらす

大河なかれてかよふ七夕の涙なからにも秋はしら露

ミ河そこの白浪かそれとかハらさりにしをちかたの

頼なき川さわたりて天河かへしの瀬ふてしてわたしか

天河こひしきをなミそとなかる滝は身をこそ流れぬる

七夕の舟よそひして天乃川なみたちさわけ今夜わたらむ

凡河内みつね

秋風の夜のおりにきわかれて七夕ハありてぬる夜なしに

七月八日のあしたに

道綱朝臣

七夕のこゝろをしれハ天河かはせもかへるなかなかにみえてわかるゝ

おなし心を　　貫之

あさなけくみのふもとのおきはらのそよきにそへて

おもふ事侍く　　よみ人しらす

秋風のふきくるよひはわひしさそまさりて思ひ施る

題しらす

まつ山の初雁さそふ秋風は吉野の山に吹そめにけむ

業平朝臣

ゆく蛍雲の上まていぬへくは秋風吹とかりにつけこせ

よみ人しらす

秋風に草葉そよきて吹なへによのひとゝほのかにつゝくれ哉

川しゆる

ひくらしのなく山風をしのやまの今宵すまなむ

よみ人しらす

日晩の声こそかはれ松虫はむかしの今をおりはへて鳴

いつはりて鳴もしつるかひとりしてきつゝ人まつ宿の松虫

秋風の吹ともなしに草の根ことにむすふ露かな

我をのみやかたみにのこす秋萩の花の下草露そこほるゝ

古今こゝにやなきやみの秋にはや紛松虫の声のかなしき

秋の野におきのはそよく夕されは人まつ虫の声そ鳴なる

秋風の吹にし日より昔をもしのふの杜に松虫そなく

藤原元善朝臣

秋の野に世をまつ虫とおもへばや聲のあやには誰かよふらん
　しらん人まつらむ

風寒みなく松虫の涙こそ草葉色とる露とおくらめ

秋風の吹くに雲は山をおしなみて立つゝそよとこそ吹け

是貞のみこの家の歌合に

壬生忠岑

松の音は海の声して秋風の雨聞ゆれば秋とこそ知れ

秋太浦にふく松かぜのまさきのかつらくる家に待や

きゝつよりおもひそめてしまつむしの声はよもすがらつきせぬ

左大臣

をしかのあさたつ小野の萩の花露をおもしとおもはざる歌

　きゝはしつ涙

小野道風朝臣

ほのかにも見し花散る物ぞ松風に秋や見ゆらん

ちるものの秋とはかねてしらねども秋やいかにて

つきはなみちかくなりひとりひとつにねつゝをまつ

よみ人しらず

わが宿は夜ともなく秋の野のなかりて秋の風も錦織らなむ

　秋

わがやどの山田の風のつらなりて露をうちはらふ霞の

世のうき事　藪栄ゆる文

草乃はにおく白露とみてゆ秋のはしまて露のちえ絶

後撰和謌集巻第六

秋哥中

延喜御時に秋哥めしありけれはたてまつりける

きのつら梅善

秋されは風立そむる時よりてたか山おいつくさくみえてさひしき

花見にと出にし我を旅のそらさはかりしらくふしはしらつゆ

寛平御時きさいの宮の哥合に

よみ人しらす

浦ちかく立秋きりはもしほやく煙とのみそみえわたりける

おなし御時の女郎花合に

藤原興風

おほかたの秋はなれとも色かはる花にたにしつくはかりける

よみ人しらす

秋の野の露におかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる

女郎花花の心のあたなれは秋にのみこそあひわたりけれ

ちくのかくにくゆかれけるよせんてこのみ

かこたえはけつるもみち葉てり

平清定家

秋毎によなよなの露袖にかくしてさくらの秋の

そらなれし

延喜御製

おほ方も秋は侘しき時なれと露けかるらん袖をしそ思

亭子院のおまへの花のいとおもしろく朝露

のおけるをめしてよみをさせ給く

法皇御製

白露のこゝろとみえておりけんわきてその後もやうき物を

かへし　いせ

うへたてゝ君かしるしの花なれは玉とみえてや露もをくらん

大輔か後涼殿に侍けるに藤つほより女郎

花をおりてつかはしける

右大臣

おりてみる袖さへぬるゝ女郎花露けき物と今やしるらん

返し　大輔

萬よにかゝらん露を女郎花なにおもふとかまたきぬるらん

又　右大臣

ところからおほくの露のやとるなるつまかくさめると思はなん

返し　大輔

今はゝやうちとけぬへき白露の心をくまて夜をやへにける

あひしりて侍ける女のあひかたらひて侍ける

まてくることはさかりわたりて八月はかりに女の

りとなむもの思ひつゝひをさしへて

ゆふされは　よみ人しらす

白露のうへはつれなくおきゐつつ萩の下葉の色をこそみれ

以下　いせ

いかさまは草もおもはぬ秋なれと風よりさきにちるらん

おとこのりもまつらん家く　よみ人しらす

人のさおもてそそれはかさなるに我は露のさ秋をまつ

人わりもおもひてつくさ我つらちりけり

思ひし事にはありける　中宮宣旨

秋のさかりに出つつけしとおもふやと若物の露にぬれ

ぬし　いせ

宿もせはつゆさへつつそ我みるまてに花よ人やこそまと

あはれしらぬ　よみ人しらす

秋のそらのあさはかにおく露は我身に人のさためなき

おもひの草と白露のきえてわかれにつれなきはなれ

露の身の我みそおりし秋の色をかくれそわかせなきことかな

　　　　源人保

わかさのこの露ひとわかれあらはもなれやまつへきの

ころみにわかなよおもふことのありとをいひ

八くさのれいすゑかへしもかは　よみ人しらず

しら露のおくにおもきに風ふけハ萩のしたはもいろつきにけり　家持

八月なかの十日ばかりに西の洞院なる所にて

かはりに萩を思ふもうちのへにいてゆく

そよぐかせにおもかけそむる

たゞ大臣

萱の葉の露ハちりもとも七母郎むかめかへてこゝハ野にかへる

定ハしらず　よみ人しらず

秋の風ハおかめ宿の庭にさきたる秋萩をおしみおもへは

おき風残るものにの晴るにもはなのうへ　さかり

たゞさく花をおもひて人もつきすとて

思ひなやめくさくハ人なみをしあらちおなみにおもみおもたれ秋　よみ人

あさのつゆそれ　ゆきゆきさ

ゆきくらしおもひてかくらむ秋ゆく麻衣寸野一秋萩

宗于朝臣

わかやとの風はまの縄萩ちかめかはりたらん人やらくやしとは思ふ

よみ人しらず

白露のをくまくおしき秋萩を枝ながらかれぬ秋やかはらん

もしのつとわよくる手事をこのれにこれや　家持

たいしらす　貫之

秋萩にうつりて秋をしらつゆのおきそふるにも

此ハ忘ル次　天智天皇御製

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわか衣手は露にぬれつゝ

よみ人しらす

秋風に露をとくなるて何雲れもなきをやとらん

秋萩の枝もとをゝになりゆくハ露をおもくおけはなりけり

まそやおる花か上の白露をけさすてまにぬく袖かな

延喜御時うたあはせに　貫之

さを鹿の立ならすをのゝ秋萩における白露我もけぬへし

秋の野乃草ハいとゝもみえなくにおく白露を玉とぬくらん

文屋朝康

白露に風の吹しく秋乃野ハつらぬきとめぬ玉そちりける

[illegible]

秋の野におく白露をけさみれハ玉やしけるとおとろかれつゝ

題しらす　よみ人しらす

ときかハ千草の上になる袖をもて露とのこ人のいかならん

白玉の秋乃このはにやとれるハ露とは思へハ露かわかるゝ

秋乃野におく白露のきえさらハ玉にぬきてやかけてみましを

からころも袖くつるまてをく露ハわか身を秋の野とやみるらん
大空より袖ハひちぬるあかつきのよかすくし露やまさるとたん
袖とふかく露の袖しけきあさくとのうさ時に渡かなかな
わさ?ん方とてよめる
貫之
秋の野に草もわけぬを我袖の物思なへに露けかるらん
かさやぬ
いくよへてのちか忘れんちりぬへき野辺の秋萩みかく月夜を
よみ人しらす
秋の夜の月の影こそこのまよりおちハころもとみにうつりけれ

いつとても月みぬ秋ハなきものをわきてこよひのめつらしきかな
秋の夜の月にかさなる雲晴てひかりさやかにみるよしもかな
小野美材
秋乃よ半の月の光ハよそなからをのか枝よりさやかなりけん
右や婦
秋乃夜の月をあかすとてわかみハわれをうしとも
雅正か法師の家にて
よみ人しらす
秋の夜の月乃光ハ清けれと人の心のくまハてらさす
秋の月つねにかくてる物ならハやミにふる身ハましらさらまし

八月十五夜　藤原雅正

いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひのめつらしき哉

よみ人しらす

月影はおなしひかりの秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり

月をみて　紀淑望（光イ）朝臣

いつとても秋やこのんの月の光の色をかはる覧

貫之

衣手はさむくもあらねと月影をたまらぬ秋の雪とこそ見れ

よみ人しらす

天河しからみかけてとゝめなむあかすなかるゝ月やよとむと

秋風に浪やたつらん天河わたるせもなく月のなかるゝ

拂ふ風も折しも月そこれわつまた河の道そちる渡なる

小町か姉

なき人を我思ふ秋の夜しそ涙の川のみちまさりけれ

よみ人しらす

吹風にありさためなきのむすひ秋の心をあはれとおもひ

これさたのみこの家の歌合のうた

秋の夜のひとつあまくすゝとかきすことの葉にそありける

露そよあるら　藤原清正

わきてさと毎に秋はみなるを白露の色もをよそもかと思ふ

八月十五夜

秋風に夜ふけゆく月の影きよみさやかに見ゆるあまの川霧

延喜御時秋歌めしければたてまつる

貫之

女郎花にほふやつゆの秋の野のむしの里にはわれも松虫のなき

兼覧王

秋霧のたちかくすらむ女郎花たちよりてみむおりにあらねば

よみ人しらず

たゞしばし浪

ところえし草むらごとに虫のねも身にしむばかり松虫の声よ遠く

女郎花ひともとゆゑにむさし野の秋の野の月の光は常よりも照らして

かぜ吹けば花のちるらむ白露の色にいでてゆくかぜをだにまたん

貫之

白露の夜ごとにおきて女郎花さかりの野べのそこらひもとけ

なかなかに秋とは人をおもはなむ色にも出でて花の秋をしも

七夕のかしてぞくるる女郎花おほかる野辺にねぶりしを

よみ人しらず

秋萩にうらびれをれば足引の山下とよみ鹿のなくらむ

ともに見し人まつ虫の声すなりわれかとゆきていざとぶらはん

前栽にすずむしをはなちて

女郎花白きさかりをこえ村そまよひもくるゝやかな

すまうゐのうたあはせしたまひけるに[illegible]

おほかたのあつらしのみそのかきりにさすとも

三條右大臣

女郎花とふみてうらみおほかたに[illegible]

さしも家のしるしにもあらす[illegible]

と云ふあまよかりてしらて[illegible]

さうなみんなかるる

法皇仁和寺の家にて女郎花を[illegible]

と云ふて

枇杷左大臣

女郎花おりかくしも枝おれてしさふかけ[illegible]

そへ

あし[illegible]

とかくれしおりわもおかしかくしかへしかさかきにかくつさ

[illegible]

後撰和謌集巻第七

秋哥下

題しらず　　よみ人しらす

我なら波こさらん人をまつやまにおもひきゆるの雨よりもぬれはまさらん

秋風にあへすちりぬる紅葉の行へさためぬ我そかなしき

寛平御時きさいの宮の哥合に　　在原棟梁

花すゝきそよともすれは秋風のふくかとそきくひとりぬるよは

たいしらす　　よみ人しらす

花すゝきほに出やすき草なれはみにならんとはたのまれなくに

秋風にほにあけてくるかりかねは雲井はるかにけふそきこゆる
きりわたるまにたちかくれなん
貫之
秋の夜にかりかもなきてわたるなるわかおもふ人のことつてやせし
よみ人しらす
秋風にさそはれわたるかりかねは物おもふ人のやとをよかなん
よみ人しらす
物思ふと月日のゆくもしらすしてあけくれ秋をつけ
やまとよりまかりてつゝくよ
つらゆき
ふるさとの○の鳴つる夜あけの山はとみちをもふみ

題しらす
秋風はさそはれてこそかはるらめ池の水のやとをとふらん
音ほとけとおもはぬかわ○そ秋やまかせ色そめてけり
わかのころかりかねて猿なれやこゝろ秋ことにわく
秋ことに色かはるらめ山のはをまつかと鳴く
ひさしくよそにかくれかくもなくこそ鳴らし
人のわかさふりぬると申侍ける
みつね
年ことに雲路まとはぬかりかねは心つからや秋をしるらん
やまとよりまかりのほる時これかれともにて

よみ人しらず

天河うわそとゝさかさに嵐下忘はあまつそらにのみ

道補都にてをかねよゆうみむ時むさしに掛る

むかしの月かは立日にそうけゆる事あはれ

かりしおもひはさるのおもかけむかしの月か

あきあふ[illegible]をわかるゝ秋にもあらはや

藤原忠房朝臣

秋霧は立野のこ波とも時はこゝのわかくるとひさし

題しらず　　壬生忠岑

いその神ふるの草はは秋はなほ色こそまされちりはたむ

よみ人しらず

秋の野乃ゆふ露にしきたちおちなみあるを留めあはれ

あささむきかせにたえすもかせのふく露はちりやすらん

ひとりとてもきえつせみの秋のゝにまとふ人さへなきくら草

さくものにて乃り

こゝろあてにみむさきぬつゆの秋もいなをまちそむる夕まに

よみ人しらず

あさきりに我かけさへもあきのゝにこゝちまとひぬひとかたへなる

折てみむひとそをしみの露の花は秋の風にまかす

神なひの山をすきゆく秋なれはたつたのかはにぬさもたむくる

わかためにまさしもあらで立田山へまさりみちなれ錦へきるらん
いかにしてこのしくれにも立田の山を見るへきはかりなるらん
みなつきに秋をしなからまつ立田山もみちをとやいとひ山へきえ

源宗于朝臣

梓弓入さの山は秋風のあたることにや色まさる錦
ちらからちるわか事そ結ふらん

よみ人しらす

君となれりをしみ山も秋風にいろつくもみちの中にそありける

題しらす　元方

とくとくつゝ出ぬともみちはしをそ散かて山路やまとゐん

立田山をこえて　是則

かくはかりもみちの色のこけれはや錦たつたの山といふらん

題しらす　よみ人しらす

明る夜まての山嵐に花の色はおほつかなくもみえわたるかな

りうるとこもとて　貫之

立田山秋のもみちをわけ行はもみちのほかにもみちを秋にそ見る

読人しらす

明日帰る立田の山のもみちはゝわかたまくらにちりかゝるかな
ふかき夜さむの山嵐をもみち紫の錦かな
今よりはみる人もなき立田山あらしはしるや

これかれ竹のもとにかくれけり

忠岑

いつもこえしよりみし○秋山のもみちの錦よそにこそ見れ

あつし源　しり人をこえて

秋風の吹かへすみ山の野辺のもみち葉を夕日にてらす時そこひしき

かくてみ秋のとこよ(ん)かける錦は雨の山のもみちなりけり

わかれし秋(の)つき(?)にかくれ秋(の)のこれる秋の風

貫之

玉かつらかけつつみおりしいかに(?)をけ(?)みにみるらん

秋さむみ風のかくしたる(?)ちりおちてもみちは(?)

かれ山にをそとて　そせい法師

昔ここに山やまくらにて(?)おもしろき花の秋の紅葉のこゝろにかけて九月九日(?)をり(?)家乃

菊よりもうつりさかせよなつかしきもみちの風

あけて(?)色(?)のまさる(?)

いせ

かくしつゝ菊のよこいとのつゝみてやと露さかりけん

題しらす　藤原雅正

露たにもなたたる宿のきくならは花のあるしやいくよなるらん

なか月のころぬる露のおく木のまよりわれて

世

菊乃うへにをきゐるつくいおもくいふを世の中とて露なる時

たいしらす　よみ人しらす

さえ花の月にしふほにはこ人かなりてきえかへりてさむらん

かすみあへ長月ところ乃あかつきの菊の菊宮　とも國

かしの乃さくとてしつく

かくるをとくさくゝる菊のこたへなりて白菊の花

おもふこゝろそひまれてこそわきけれと

あそくゝくるに七百の花もそれはや花なるよ

月の夜はとこもちなくとそて

あきはきてちるもみちはゝさくの月の月のみのまゝろし

たいし源

いろくさの枝の秋の山にてよ風の吹さくて錦なりけん

からにしき秋の山道をとゝ人をもとむ錦とさかひ（ちイ　なイ）

紅葉をもとつくのさかる家のつまとぞ見ゆ

貫之

おもはぬくさとこゝろに見山出てちるもみちは

よみ人しらす

嵐乃風まふくりとちえに風もありふちわかぬ

秋の夜に雨ときこえてふるものは風にしたかふもみちなりけり

立田ひめたむくる神のあれはこそ秋の梢にぬさとちるらめ

来ぬ人をまつ錦かつとれはうす雲の梢のもみちかはわ

秋風にちるもみちはゝ女郎花宿にをりしく錦織なれ

暮の山ゐにみえしもみちはゝ嵐にさそはれみえてまし物を

もみちゝるわけゆく秋の山こそてらしき錦なりけれ

立田川色くれなゐに見えけるは山のもみちそ海へなかるゝ

貫之

龍田川秋はみなもみちはなかれつゝもみちそ流る

よみ人しらす

もみちはの流るゝ秋は河ことに錦あらふと人やみるらむ

立田川秋は水なくあせなゝむあかぬもみちのなかるれはをし

文室朝康

なこりなくちるそめてたき風のまにまにもみちはをしむ

藤原勝臣

木の葉ちる深山の川秋ふかくもみちは錦なりけり

よみ人しらす

まつ人もなき秋山峰のもみちをぬさとたむけ心ちする

貫之

見る人もなくてちりぬる奥山のもみちは夜の錦なりけれ

よみ人しらす

風ふけは浪こそ秋やきこゆらん吹くることに聲なひき
とまらんふたすれるかな浪にいりの影そへてかくれ
あひ見わたくおもふるおもひこのくにすとそ
猶あかれしたもかはりもかはしつらしきを

為家

今は秋の花たに絶しきに独ひとつ君にはあらす

忠つし　よもひとし寺

我こそは独思ひけ白露のおきよりいつよりおきつきてしつ
あひ見わくつれなき人のうらみてもよするをしらぬ
名残もおもとと乃おもかけてまたとかわかるへと

中々に秋をきえてのちにかへてきこえわれ花

前中納言定家朝臣女

秋のかみのそふにあひさく白露を風あへこしのへに花そ露
かれよりおもしろのあきさとつわれくるま

しつの藤原為忠わくさき

なさとは秋は家にまた風の音の白ふかれや我を緒はなの
ともちらとつろこそきつそとも散るにはなる

川ゆ　源とらの女

君へかる浪に秋ならて我袖とおもふ風みちとゝう風をきれお
たつしらぬ　よみ人しらす

てる月に秋もしらぬさやけさをうらみがほにもみえてとゞまらん

故式部卿のみこの家に菊浦あはせのひとつがひに
侍りけるにさしとゞめてかざしけるに内侍
侍りける

我が宿の菊の下葉をみるごとに誰人かおもひ紫の枝よりぞ
秋やうつりにけるなれば忘れにしけるかなと思ひ忘れ
のみよりもをあゆかたぬ

源ことす

あきらかにつゆをわがみのこゝろにかゝる物ゆへ
菊の花おもひとて人のつらぬかれてもそ

よみ人しらず

くさまきの露よりさきに花よりもあだにしらめ
菊の花まづそめ事をしおきけるさがなれば

紀友則まかりしたるがいひかはしてとこよりにて
侍りけるにぞふ事よりて色菊をとりて侍
りける

藤原忠行

枝もなくたゞ秋の花の色はうつりやすくもあるかな

御返し

とものり

ちりぬとも花のいろはうつるとも秋をたゞみればこそかれ

延喜の時秋歌めしありければ奉る

秋の月ひかりさやけみもみぢ葉のおつるかげさへみえわたるかな

貫之

[illegible]しのはしる　よみ人しらず

あき毎につらねてくれど[illegible]
かしこの花をつゆさへして菊のわかれ[illegible]
[illegible]花よくらして
はなちとく

みな人[illegible]まよひわけ[illegible]露[illegible]
[illegible]風よりもすゞしき秋のゆふぐれ[illegible]
[illegible]

もみぢちりつもれる木のしたは[illegible]
紅葉ちるなりとまさに秋[illegible]
[illegible]のとしこちをおもはぬ
しるくなかれて

思ひ出るときはあらし秋[illegible]
あさぢの[illegible]
くるとこそ[illegible]

[illegible]

宇治山にもみぢをみにまかりての[illegible]
九月つごもりに[illegible]書

なき人のかたみの月ハいつもみし秋ハ色なしつらさかな
おもかけハつきことわれハ
みなもと
名ゝ子流月ハみれハ人はあらすつきあけめかへさん
秋ハうと思ひけん

後撰和謌集巻第八

冬哥

題しらす　　よみ人しらす

初しくれふれは山へそおもほゆるいつれの方かまつもみちけん
もみちはゝ色つきそめぬいかならん山風さむくなりにけるかな
神な月ふりみふらすみさためなき時雨そ冬の初なりける
みる人もなくてちりぬるおく山のもみちは夜の錦なりけり
ひとりぬる人のきく身(?)神な月にはかにもふる初時雨かな
秋はてゝ時雨ふりぬる我なれはちることのはをなにかうらみん
冬風にいかにしみけん(?)色ふかきもみちのちりてなかれ(?)ゆくらん

秋はてゝ我身時雨にふる時はことのはさへそうつろひにける
神無月時雨とゝもにかみなひのもりのこのはゝふりにこそふれ
神な月時雨ふるらし神なひの杜のこのはのいろまさりゆく

よみ人しらす

霜のうへにちるもみちはの色みれは秋のなこりのしのはるゝかな

山へまかるとて　　増基法師

神な月時雨はかりをみにそへてしらぬ山ちにいるそかなしき

十月許に大江千古かもとにまかりたりけるに、はなれて侍ける人のもとにつかはしける　　藤原忠房朝臣

よそに見し花も折ても錦とみしかとも時雨にぬれてこそ

なし　　大江千古

見えわたし時雨とつれなきにいつらん人をまつやなる

たゝし波　よるへん人を波

神無月梶根とやまのすそちかのやしお時雨もなくらちさへふす

ちるやその紅葉山錦て見えしはふてかつ散つらおな

すまの家にまかくさて紅葉をかけさてそ往

ちらしける　　枇杷左大臣

人の世のおほゆきも家をまもれはいまそ衣袖錦を紡

なし　つせ

波さへ人のゆきはてけふのうき雲をみちならしこそ渡の錦

たゝし哉　よみ人しらん

名あらし家の梅かをの山にはいとう霜の紅葉まてつれにしわれ

あやのみちしるかむにてとをくまてに家はしれ

ふらしそみか　人のいしとぬれゆきて分けん

神無月ふる時ふしらて見えむ宿まつわれとなりそめ

たゝし哉

あきまて霧やまくらかさあらん人のうらみへゆかん

名の日しさしまつらしける

人の世の宿もつけてもまつ袖のけさよりもとけ出むすへきそかし　よみ人

ひさしう深雪

かくてしもあれふりにけり白雪をとしこゆるまて今のこゝろに
神な月しくる時そみよしのゝ山のみゆきもふりはしめける
宮こまて嵐さむくしなりぬらしかつらきの山の峯に白雪ふれる
黒髪のみたれて越えし山路かなおもはれまつにかさねて衣
わかなつむ山はとおもひきえのゝちたにきえぬ雪のたえまに
ちらやかな神な月に初雪をかしらにおけるかなし白妙
式部卿敦實のみこ
このころのしくれの雨に山はみなそめ[illegible]ふりにける
東路の方へ流れりとわかこゝろそへて

とゝおもひきえのみ年にけり　母
きのふまて雪ふかゝりしみよしのゝ今日ふりつもる今朝はけさ
雪ふる夜をみけりけれ
貫之
冬されは雪かきくもり空さえて黒髪ふりて白雪の山
題しらす　忠岑
黒髪の色もかはりて白雪ふれるあしたの夜のさむさ
又　清原深養父
よのなかの雪と風のみさむくさえてみよしのゝ山
題しらす　凡河内躬恒

年ことに春ハ花の数ともなく霞みにほひて雪の衣かさね

なりし哉　よみ人しらす

うき色にしもかはらぬ松のえにふる雪を花とみれ

春の日の桜をみすてなに白雪のちるを花かとみれ

おとろへしあさちか原にもみえわたる雪の下草の

よも雪と思ひねさめにあけぬとや鳴つるとりのあとの雪

ゆきふれはとくしもあしたまつらん

藤原の為相

かきくらしふる白雪のあさほらけ雪の[illegible]のこる

昨日から[illegible]して[illegible]

ときいて　よみ人しらす

白雪ハふりかくせとも[illegible]めくるたかねとしの[illegible]

貴[illegible]し哉

思ひつゝねられぬ夜はの袖の上にかゝるとはすまぬ

あはれ乃年をこえてあらたまのつきし雪の[illegible]

波こえしのゝ浦によするかもの羽にふる霜をよいつまて

白雪はおもわかれ山とみえつるかつもる雪のさえ[illegible]

かゝる雪は花とそふれる心もなし我をおもひいてつ

みつの折に春のわかれのきや枯し草をわかぬか

いかにみてそ過ゆく白雪は消れぬ花にかりよはまく[illegible]

天河なとはおよそされはやうにまかふこといつともいふ
ともまてく雪乃ふれは我宿の松をこそまてちかくは道
そのつま木水にうかみあけなく風くさのかみにたつぬ
山をこえつけなく白雪風きくやうかくこひつきは
松乃えにかゝる雪のふれるとそなき風花といふなる
ふる雪はさそふ事もとまれ花に見ゆるも枝にかゝる
浪の分かくはおもふにうれなみとけぬはいへ沖の信
ある雪もおりの我身おもふよしやつともてなさおほか
よろこひて月とそみえて秋霧の庭のこそまことにさし雪
梅の木ののはしらて雪と春をめ風ちるつ宿の花らん

そうけも嵐さくし出とそのはこそうはさしとおもふ
きうふくふかむ雪とみる時そたち乃白根にましくら
舞くねく春の家なるは花のさかりに海の白雪
春をくれるも白雪は小倉山みなれては風のうらみ哉
ゑ風のなかに見舞よりも風の下によりかへる花
むら嵐もろ乃よろしかれる白雪はてゝ月影のつもるゆかし
このはしゃらのおもわかふてされ鶯のやのあきらの道
冥の色の道とふりもよちらなふてまさくれ哉なき
みつくもの別歳よおもひてくらぬはきへる
分さるをともえおもひもらくれのとも乃さしのめるの

つらゆきの日記かへしつかはする

藤原敦忠朝臣

ことの葉にとゞめし月日をみるからにむかしにかへるこゝちこそすれ

後撰和歌集巻第九

恋歌一

かうしておもひわつらひ侍ける人につかはしける
おもふこと文にかくえ侍らねは

源宗于朝臣

東ちのさやの中山なか／＼にあひみてのちそ侘しかりける

あひて侍ける人の許よりかへりて侍ける
のさうしく侍けれはまかりいてゝつかはし
ける

貫之

暁となにかいひけん別るれはよひもいとこそ侘しかりけれ

源おほきかかよひわたりける女をえあひかたくて
なかたえてのちとしへておもひかけぬにあひて
さはらるゝことありてつかはしける

よみ人

あらまほしきよしを人をこそまちつゝかへらん人さへ
おもひあまりいかなるのりかよにあらんと

元良のみこ

そてつゝきしき

くやしくそまゝにしはしもふることのあり

題しらす

藤原かつみ

ならのはのよもなきあとをしのひつゝあらはれしかは

やまとよりあらしふきて仏の御法は河に
はしまりて　　よみ人しらす
おもふ君を忘れてこそなき人の御面影そ浮
かへし
秋霧のはれてまことを河辺には無面影そあらはれにける返
女よりつかはしける
今はとてかはる心は我ならて風にまかせぬ身のおもはむ
まことゝことなる事を仏ならて人の心を又おもはなむ
一御仏の法にかはりしものゝ心はなきを
さうしはつねにあらん思ひつゝらむもしからん

いはむ
思ひ河ふかき思ひのあるならはうきなもあらそてそいはむ
題しらす　　三條右大臣
思ひやる心は空にゆくものを逢坂の関をこえてもなにか
女よりつかはしける　　よみ人しらす
うきなからやむまきとおもはぬ我なれや思ひの外に成風
題しらす
思ひあまり逢て二度からへてあふにかひなき身ならぬ
題しらす
わかれてはまた思ひつゝかずかずの夜を重ねてもあふよしもなし

よとしはかすみ海門のきえなくそこなかりけるをとはれたまひ
わうこと〱あひおもひ人あまた侍りけるかなかりけれは
みやこよ松山よ今はとゝくちわうるみよめてしは神なみ
むかしよりけるしく
今は海にとまりなかれはひさしくけぬとよそにしまひてあまた
しまひ花（?）になひものとまうよとけぬみ人あはれと
みかのちとまりしよまつらしける
かき人とかくまうしくあふみ国（?）まうちて経りまか
ける
かちせともいさや思ひいでられて人ひとつかひまは

題しらす
世中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらす
ありてなけれは
りしくら　惟之
あくさくあはみとさけや〱かゝかなるてに幸
あつちよめみさゝまて〱わたれとおもふ
してそれくものありさまつらしくら
　　　惟のみまい
から衣きつゝなれにしつましあれはしはるるきぬるたひをしそ思ふ
あはれちけるへのゆきうらそれくこかる

ゑんはゆかしき料紙　きのかみと
親にみせまいらせ候はゝ山井はおさなく候まゝ候へ
返し　草案文
わらはゝ事をゆるしまいらせ候はゝ親に候はゝ
たゝしまいらす　よみ人合はん
返し
いくたひか雨の夜にも笠の上に露涙を我身は袖ぬらさん
糸の子わかまきていはあるまへはてゝ思ひなきことに
無気ならしまいらせ

御事はいまは雲井にてうらめしくやとおほしめされ
返し
よそ目にやまひともそれも御事はうたかひ雲井にまよはん
又　おもは　しとゝ
いまのかくのみ思はれて白雲の空にあはぬかなとおもはん
返し
とやかくを人の思ひさへ涙にはかなくうき人のすかたおもはれゆかしく
又いしまいらす
恋しきにみつる事をなにとはしたなくよみの袖
みそめてわかれの袖そ家のうちなくさめよかし

女せんしにまかりてつかはしける
ねたかりし風のうへつかへて時をこそさかゆくかたをとれとれは
かへし
あさなけにうちみるへき君のみなもとのひまなき影の
そのかみはむかしの人とこそ思ひしかはらん
人かへしをすくしこそかけれは川れ
しれる
あさつゆの月日をみるをとめの山風につけてこゝちよき
かへし
月日をもしらてかそへし君こふる数をもしらぬ我身なりけり

女よそにてありけるをつかはしける
こえてかくる女郎花とこしまことならは
とにかけに花をそのとりにしはやくもあらなん
まつにいへ津まてかへりなん
こゝのへの春の花をも思ひやらましかは今夜
こひしさはわかくにかへるものならは
女のもとにつかはしけり
贈太政大臣
おもふことありとはなしに君ゆゑにあはれもしらぬ身となりにけり
かへし
いせ

ふかき淵に落そめし身のなかれてもたえぬ思ひの日のたつらん
おとこ山のころもあはせによりあひし世ともしらぬ
うき世のなかれにあふとみえしこの
あはれさをかたるにもたのむ所もなくさすらひ
源氏の山に世をたのみ
花とちりにしのちに鶴のやとりくさもなき
かの一　あはれのみ
里ことにあはれに見る都にすみける名残
さりとてはつらき身をうきふしにつけても
春道のつらき

かなしきぬる山の入相の時なれは今は月はさらにまた
いつも世にあるは身のあはれをひくのちの命よ
つもる又あひみることもなき物語まて
世をのみそ
あふ事もいつとそしらぬ命かは　わかれのなかに
世にのこりとゝまる草のはつかしく
とゝめてわかれし
よしなき人の涙
おもひいつる宿のかたみのあはれはかなき
かの一　世にのこるこの山かけ

うらみつゝ我は忘れてあらし人はまつ忘らるらむみそめわたるかな
平定文の許よりわすれのかへしをこせまつのことを
いひをこせて侍りけれは　右近
浦ちかくあさきふかきもわかなくに難波の浦のしらなく
哉し　定文
君をおもふふかさくらへにつのくにのほり江みゆる我ならなくに
はしくさのわかみをかくる人はなつらきもとを　伊勢
いまいかに人はゆめちもかよはなんつらきもとをみる夢路哉

返し　よみ人しらす
ともしれぬ玉もよりまつ人の心のほとをみるかな
きのふゆつく人はつらし計か
此世にてはかなき身をはなけくとも
人をあはれと思はゝくれは後のよに
のちのよにかはれし
ゆふくれに君をまつ風身にしみてなれそめし
題しらす
ひとやらぬ身をうき海のなかれての
おなしく都をはなれしこと

住吉のきしの白浪たかくハおもはぬ人のこゝろもあらはれにけり
君ゆへにまよふ袖のなみたハ思ひのあまりにあふれてなみだ
われハわが身のつらさをおもひしにいかなる人のなさけ
世の中ハたゞことゝいへとあはれにかはらぬ
恋しさのつきせぬをみるにも[illegible]
君をおもへばわれもおもかはりのさまをまつ[illegible]
おもはくのしめくくる女のうきよの[illegible]
しのぶ恋ハいつまでもくつらしと
ひとへに我人の別の暁ハいとこそ人のうらみなり
返し

みそれふ物ゆへにこそさけおもふやうにいはぬ人の恋しさ
情ハわが為かはおもはくによ
無きなかの物にまさるおもひもあまりにあはれなき
返し
打まいるおもひのまゝによおもはくに[illegible]
おもふ人の命のうきよのつらさ
わすれじとつゝしけ毎
数も人の思ひのあまりにおもはくに
返し
こがらしのさむきの下の葉風にちる人の命[illegible]

おとこ乃きゝて女むすめをとらへておやの家に
月かはりてもとく
かりとてかきはきぬとそしりとそしらぬやうにておもひわひて
ふりしらん
おもひあまりたりとてなみたにそみそめけりて宮をかへれ
身をうけくあはれ海に入てそおもへは人のありとしにたえ
雲井より人を思ひやりて我ことをしのはれなくよ
人はみなきゝつ　涙ひとつの朝
わさとおもひてきかむとてあはれとおもひて人の恋
返し

ゐやまのゐ軒にむかしからかはしこ事のみなみにしほとゆ
おもふみしかはきみこひしく人をおもふと
いひしかた　見る人にも涙
いせの海によりてうけたるかすみの我はなれ
人にわれけり
いつまてかいはましとて立のうき涙にもしの袖の
かくしつゝ袖をまちてそあはれとて
おもひとこの歌をわか時おりの事
ことにわかるゝ袖の
女のわりなくつゝけり

よしの河うきせは深きを見るからに世をわたる名をもこそたてれ
思ふてふみなそこ深き瀬川にて人をよそにもみるかな
返し
おなしくは深き心もそめつへしわかれよかし　大輔
大輔につかはしける　右大臣
色ふかくそめたりけるの浅き瀬によそへこし海さらなかな
返し　　よみ人　大輔
見る時はことそともなくみぬ時はおもかけにたつこゝち(こそ)
おもふ心あらんとそことわりなれ
山里のまつに(も)風のさわくなる人を待よはし

ちかくありける女につかはしける
ゆかすともをかしからむ山のはのつきおもひてもおもはゆるかな
女よりつかはしける
人の心のほとも見えぬ君をこそおもへおなし心に　よみ人しらす
返し
つらからは秋のつまをもかよはなん人をもしのふ心しらねは　中務
女に川をわたしけるを
人をおもひわたりてはおもひ川すゑよとたえぬよしもあらなむ
おもひそめよつらきしれる
中務

ちりかふ花のしたにまかせて見るこそあはれなれ

返し　源信明

便りさだめぬ山のかげにて我身をまかせて君がこゝろにまかせ

まかりける女の人に君がもとより

まつらん[illegible]

返しあまたゝびゆきあふさかの関水にいまの松風をきく

返し　よみ人しらず

住吉の岸のみかはに世をへて松にかかれるをみまや

おもひつゝまつらん[illegible]

うつろはむことをかねて知りながらあふ事のかたきは[illegible]

女君あつ侍りけるに

白浪のよるよる君をまちつゝぞ住吉の松

おもひつゝつらしと[illegible]

あふことのなきをうらみて[illegible]のうきにつけても[illegible]

後撰和謌集巻第十

恋哥二

女のもとにはしめてつかはしける

藤原忠房朝臣

人をこそ思ふおもひのあるものをまてよこふるそいつかなからむ

みふのこゝろを

ひとわのゝ物いふなしのつくぬれのよ人をこしをへん

きのとしのり

真糸以つもりてかきぬ人をおもひやわれて恋ゝかん

まくら一日くれ母まつらきる

源中正

歎くとていかによそへて出る月の影もなかはにくもらさるらん
人をつらしと思ふ物かは

兼覧王

あさ霞山下とよみ葛城の峰も雲井にたちかくれつゝ

忠房朝臣

かくれぬに忍ひわひぬる我身かな井手のかはつとなりやしなまし
なき名さへしはしたつらんおもひつゝいく
のち

藤原輔文

あまくたる神の代よりも千代ふへき

よしつかせてあけ事をさきのわかれの
ひとつたにしらぬ人をまつ
おやしらぬよの中に思ひしり
くまりかけてもわかれゆくまて

七條院右京

さしもかくしのふることの数よりも露にわかるゝ
をしのひて

敏仲

あひ見ての後の心にくらふれはむかしは物を
おもひ

大輔

うらみわひほさぬ袖たにあるものを恋にくちなん名こそおしけれ

ゝ文　敏仲

いみよ称おわくる人なみなき川うれしきを我しおもへは何やや
わきもこは八あはれてこころくもの…いれ恋しかるらむ
あはれひふしおもひて人今さらなれくもかはよなれ
この井ねよかきつけくれゆくきそ

菅原敦忠朝臣

かりそめの人のいのちを露のまとたのみしかなかなは
あはしとおもひていのちかくあはれいさよふこと絶
たれたとてもかひん人をいかなる人のつねなれ

藤原頭忠朝臣

鶯乃雲井よ立わくなく聲を春とききつつ秋はたつ
たえかよふしくる霞あはと今わかれなむとさきて
はかりなら

平時望朝臣

かくいはて君かうりとしふ春よ今ものこころありやきえ
おもとこ乃ここそわれなれつらしきそ

こまちのあね

我とは思むしろ露かからん露のうえの弱とこそみえつつ
ぬいしれし

枇杷左大臣

よ移ろふのおもひ法のあひかたれけりとそかはるなる
かへし

いせ

よしいひこゝろ女あり事もあらぬ我をかたらひけるに
人のもとにつかはしける
源等朝臣
東路のさのゝ舟はしかけてのみおもひわたるをしる人そなき
紀長谷雄朝臣
ふしてぬる夢ちにたにもあはぬ身はなをあさましきうつゝとそ思
女につかはしける　よみ人しらす
わ海乃石をしつめてこひわたるおもひつゝくる身にしあらは
秋の夜の心のなかく思ひつゝ筑波山にそ見えにけれ
おもひこそ
おもひきやあひみし程のとし月をかそふはかりにならん物とは
女のもとにつかはしける
貞よのなかさらにこの山のこすゑよりもおもひわたるとしら浪のたつ
とのみをそかひてそあらはれはこそ女乃
なきにも思ひ寄ける
藤原敏行
難波かたこゝろつくしのわかれちに人にいはなん君をまつらん
ことさえこゝろありけれはさそ見えしかなしさのそはるらん
こさ事をかへて京へのほりけるをつねにきく
乃ちにかくなむよみてつかはしける

よみ人しらす

あとや君とすみけん白雲のおりゐし袖にぬれしかは

あひしりて侍りける人あまたありてとひ侍らさりけれは

おもしくいりまてやまさといさらやとこそかれさ

侍らすかれし

はらくともおもはんとそ思ふまつれにしも人やりめとさら深川

人のりとまたかしまかれなれともいひて侍るを

見しほとしかこそのけ侍るら

在原業平朝臣

年をへてすみこし里をわかなくよたとらくともかれて深草の

おもしく侍るをいりて世にもよにて世にかくるを思ひつゝ

里あはれ世にかれし

元良のみこ

まれに逢とりやそのつれなれともつのおもひにみなれは思ひこ

思ひしとわれさのかりとよのん又かぬしなき

人のもと

藤原おきかせ

我恋とこひ人に思ひたえのほるかの数をかへつゝ

いかにしてみ思ひしとわかさもかはいらすにし

わかれとやわかされて

貫之

いろかはしのふつりわもれぬ思ひをそえやはみせたる
池のはちすはゝちすか世おりしよ文つゝしむわたらか
ならわしとて色事とせられはふつかしは

大江朝綱朝臣

わか身の山井はそとしふきかけてかわそとえぬなかれ紀を
お茶つゝゑ〇に池のくゝはつゝしくゝゑをさてゝさて
いふさ京の花はふるゝにし

為家

元良のみこ

大かたは今そや我身の風をかけしむかしの月のつきもと俤にかゝれん
思ひしおほつかな〇

人はさはれいまさらなにか身わかれは昔も今もおもひいてゝかはらぬ
色事をまわすうゝ女の文み給ふつてゝ

よみ人しらす

わすれなくさは風の海の千鳥は月は都そそこ海わかれ
なかしとこゝろよそへかれなしおつゝえおほかたの
女かり

河とみつくまぬ中にあるたらはそ池思ひのことくなかれ
ならしわか汁安女につらしきる

梅云頼朝臣

わ雲よ方の引つかの声よのこゝろさてわつかおかれかな

貫之

住乃えのまつハみよにあつねと浪ゝとにゆき宿よよ世まゝ君
兵藤よみゝしるゝみる今そしる

見ねハしも年ふにあひ松かのやえあくらんよ(そは)をりかゆかかし

月かけハそてにかゝるらんつゝしゝかくれ

中将定家

宿をさへ さそふまへも君かとよおもひ君を友あふへきと宿のとをの道

延喜御製

ほれし

うちめてともつねもとのをうかんめるましいかとやさか沼

たゝしも寸

藤原あね

あさくゆくかくと渡り渡門我身ねかやわかたのゆん

わたしかしのとりやか

我髪乃ゆきハらそは白妙乃ゆ海の波しつ(つね)一ねわ

貫之

あみさかかはたのさゝれもしつくもゝハあさしいまこ

住吉乃ひのもの

君かねはやかそもあはのあかくてかやあふえふ

よりもかくかよりし住よるふるつかれ

貫之

玉くしけのかへてもみのら命ありて(み)さ月長さの恋ふよすかな

なくしもなけ　平定文
我乃やとりてこゝを過にしは世にもあはれむ
なし　きのめのと
ゆきのかたのしかたちをちてなん侍りけるを見侍りて旅に
おもむきせられける家のあたりすかりてつかはし
花にかへる　つらゆき
帰こる我身は露とおもひしかなしきかなる草にきつかん
つゆしる涙　在原元方
みちのくにまかりける人によみてつかはしける我身を
東路のみちのくにいとはなれにしひとを

あやめもとをしてもそいはまくらもわかれさへ
けふをしらする　藤原滋幹
なかとをしそたちなれのへもゆかなん
たいし涙　よみ人しらす
高砂のをのへの白雲かゝる人のたゝをこそみるかなれ
長明のみこの母更衣身まかりにける時御かさなる
涙のしける　延喜御製
さそふまに河にむかひて君をこそ恋しき
たいしらす　菅野治
かきくらしわれもたゝよふ浜千鳥ゆくへもしらぬ涙なりけり

あわこころ空にあまりてあかすかはかなる今
つゝむらん　　藤原敏行朝臣
まれにあふこひはわかみにまかへてわかみの涙なりけり
なりけるつゝらにまかる

梅實利朝臣

流しとしも思ひそめぬ涙川なかれて今もなかれて
見えし

よみ人しらす

あさくこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかはたのまん
人をとひこひてらへしけれ

平定文

なかなかに人をみてこそまさりけれ恋しきことのかはるへき
まし　　かへりの
木やあかくしみてこそまされめしさ海たえし
おもひかけすかはかわりけるもちえそらに
なれをそへてらけれなる

貫之

うみあくるつゝみの夜さへてなかれぬらん
おい志かて涙かゝる人とひきしらすかく
月かゝるかくれなかれはつらしけるよ

壬生忠岑

すゑの松山こえる白浪のこゝろおもひやはてはいかゞ侍らん
おもふこゝろありけるかはいまはとて人のもとへつかはしける
つかはしける
よみ人しらず
思ふとも忘るゝ事もある物をとありしをさらにたのまれぬ
也
春日野のをきのいのちとはかなさもおもひやさこそはつかはれ
思ふ
とをき世におもひけるをきゝて人のもとにつかはしける
人のわすれかはしたれは

右近
思ふとも忘るゝ人のかはる心をいひもてまかりけるん
さてくもの袖の色やはてまさりけるの涙
もみちばのちる木のもとをいつはりかくるみ
かくて今は世になき人のありしかひなきを
源清蔭朝臣
さりとも頼むことありけるをおもひすてゝのちおもひ
よそにみるとかのこゝろはかみをさへ
さみしき人のこのよにきかせけるつらく
なく
よみ人しらず

これはくらこゝろふりかへる[illegible]うらみし

なにかあはさわ[illegible]川のうきせも

源〇あきら

思ふ事やあらはぬ事をもちはかき[illegible]死とも

きしつしらす

藤原清方

よの中の風[illegible]〇[illegible]うちわたすあか[illegible]

大伴黒主

白浪のよるへ[illegible]おもひあはすれ[illegible]

源[illegible]

[illegible]

ちりつもりはてゝ[illegible]

源[illegible]

[illegible]

きしつしらす源

わか事[illegible]

藤原清正

つねよりもちらしもそ

みなもと

今はとて[illegible]

[illegible]

源定光朝臣

かわくもみしまてのやまのはに月をまちつゝ
　ゐ輔朝臣よりおひてしくつゝのみしおも
さわ久人かれ　清正母

かわらぬ君か心のうちにすさむ袖よりぬれぬ氷かな
かへるさのかなしさをたつねよりも新

藤原有家朝臣

かはりみの葉にさきておもひやりて涙にぬれし
　きえしらす　大江千里

奥山のやまかけのすゝみをもわせて一すちにすゝむ衣をしのふ

きみのくかりのむねひとつにかゝるわかなさ
とくにて行ひとりさしはてにこれ侍ひとつ
　　　　　　　　　　　　　　　元良のみこ

あはれちる花もかなしきにひかりさきてのこそ
　よしらす　　おほいのみこ

つくのこおりしもはかなみをつなしてんよこそ立
きえのくあひてはひとへかへり

藤原忠国

ひさかたのそらをたつねてわか立へ氷をはらへは
寛平のみかとゆくへかなさゝせこゝろしてのこる

御帳のめくりよのたい今さつかうさらくらして
めしよせられけれはかくかきて御帳にむすひ
つけゝる　　小八條御息所
立よらはかけふむはかりちかけれと誰かなこその関をすへけん
かくてかへりしよつかはしける
左近（衛イ）
我袖は名よたつ末の松山か空より浪のこえぬ日はなし
月をあはれといふハいむなりといふ人のありけれハ
よみ人しらす
獨ねのわひしきまゝにおきゐつゝ月を哀といみそかねつる

おとこのもとよりつかはしける
かく御おもひてあるへき人は今はかへしなき
ちしめくく人よのおもひつらしきそ
人つくよいまとのいの中にわそ思ひつくもの山のはみなく
たのみもをとそてつかはしける
貫之
たのむかもあはれ思ふあやしきかな今はなきそ
人のうへのわか身よりもつらかるは
つきせす思ひなかたつらきみよとはいくたひか
なにかはかなしときゝてつかはしける

よみ人しらす

人はまよひあやなくけふはなかめくらさぬにひとりねなれは

人はおりひしけくみちもあらはやわかすみ

いとゝあはれなりけくはしれなふかくなりて

まさりてこのおりいひけるおもひしりわかれ行く

もさしくしりとつれなくなれし

かの男は雨か風の吹きて深くなりにけりとひさき

けふはくらされてつれなくもあれとして思ふに

さ海に見えるなれはいつくけむ

ほとゝきすのこゑもきゝて秋の夜の鳴出てくる月のとも

おとこの女ともにいひけるを思事なく

ありくるからもありしにたちかへり

かくて京へもあかりてわつらひて花の

よとこのひとりわかれてありくつゐになんありける

まつよひなむといひくれなる思事に

草枕このたひつゐつるを川のうきしつみくれなゐかな

おとこのありしことゝもあはれにてまかりてあはれ

はつきのはつか十二年山にこもりてなんかへりき

しりきらしさわくつるいひへてあはれなりけるひ

なくさめのおとゝいひて思ひつゝけるこゝろを

ときゝてわかれて
それより吉野の郡山のふもとにやとりける
返し
あしひきの山にかゝりてよしのゝつゝみをかきにそゝきまれ
人をおもひしつゝしけゐ
平定文
こ海千鳥のよをしれとものそしらゐらけは我をかこつ
返し
おもひやる
ゆくすゑのきしよりてつゝしみもこゝろさしそかなしさ
人のりしみをくれてもつゝにしてなりに

おもひいてゝてうみ越ゆるこもしらぬこ世
ともかくもあれ
涼しかるあまの羽衣
はまかせつる草とみかくすきの海松わかれ
かくてそこ世にわかれとやつくる人わ
かれにしてあまの文のおしよとこ夏の郡に
はるかくそこ世の中にかく
とく露のうちはなりけれとあはれはかくしこのむ
返し
おほえもしつゝあはれともなき花のとまとゝのこひしかもあれ

国立公文書館
National Archives of Japan